

# 京都におけるコンタクト・インプロヴィゼーションの受容

大阪大学大学院 古後 奈緒子

わが国においてコンタクト・インプロヴィゼーションは、映像や実際の公演を通して、モダン・ダンス以降の芸術舞踊の展開の一部を担うものとして紹介されてきた。この身体技術は、1990年代にワークショップを通して実践されるようになり、現在も関東、関西、広島、松山などで教授活動が行われている。日本で創作される舞台舞踊の多くが、外来の舞踊文化に大きな影響を受けてきたことを考えると、そういった舞踊文化の個々の受容は、わが国の芸術舞踊の展開を捉えようとする者にとって共通の関心事であると言える。このような関心から、京都におけるコンタクト・インプロヴィゼーションの受容について、資料の収集を行った。京都というトポスに特に注目するのは、コンタクト・インプロヴィゼーションの受け入れ段階が、それまでの京都にはなかった舞踊創作のための土壌の形成と密接な結びつきを持つからである。以下に、京都の舞踊創作を取り巻く状況に、コンタクト・インプロヴィゼーションが果たした役割という観点からこれをまとめる。

京都においてコンタクト・インプロヴィゼーションの紹介を行ったのは、1990年代の前半と後半で異なる二つのワークショップ・フェスティバルである。

【美のフィールドワーク】(1991年)がその先鞭をつけ、【京都の暑い夏】(1996年～)が本格的にこれに取り組んだ。本場アメリカにおいては、コンタクト・インプロヴィゼーションは余暇活動としての側面も持つが、京都では専ら芸術的な関心から創作のために始められた。個々の舞踊家が能動的かつオリジナルな動きをいかに創出できるか。また、舞踊経験の多少や技術的な優劣を問わずにいかに同じ空間で交流しあうことができるか。このような問いに応えたのは、マース・カニングハムの次世代の舞踊家たちの試行錯誤を反映する、実験性をとどめた初期のコンタクト・インプロヴィゼーションだった。欧米の舞台芸術において、コンタクト・インプロヴィゼーションがすでに被っていたアクロバティックな洗練、人間関係の表象の道具としてのどちらも、受容者の関心外にある。彼らにとってコンタクト・インプロヴィゼーションとは、自身の身体の未知の領域を探求するメソッド、動きの質を高めるプラクティス、あるいはすべての舞踊に通じるベーシックである。【京都の暑い夏】の長期的取り組みにおいて、それは

グループ・インプロヴィゼーション、アレクサンダー・テクニークなどの要素を採り入れつつ、受容者を創作における自立へと導いていった。

今述べたような活動は、コンタクト・インプロヴィゼーションを含むモダン・ダンス以降の舞踊形態に触れる機会を、独自に製作してゆくことと並行して行われた。それによって、京都の舞踊創作を取り巻く環境は1990年代に少なからず変化した。コンタクト・インプロヴィゼーションがもたらされる以前、1980年代末まで、京都において創作舞踊といえば、モダン・ダンスと暗黒舞踏以外の選択肢はほほないものと考えられていた。また、舞踊の教授形態、集団創作のあり方も、多かれ少なかれ階級制をかたちづくる師弟関係にもとづいた「家元制」に擬せられるものであった。【美のフィールドワーク】に始まるワークショップという教授形態は、モダン・ダンス以後の様々な舞踊メソッドを試してみる機会を提供する目的を持つというだけでなく、特定の技術様式を共有する集団への帰属、それに伴う閉鎖性や拘束性、模倣にもとづく一方通行的な技術指導に対するオルタナティブとして採用されたものである。また【京都の暑い夏】周辺では、ワークショップに付随する様々な発表の場—自主公演、戸外でのパフォーマンスなどが共同で開催された。そのほとんどは、1998年の個々の舞踊家の創作上の自立までのわずかな期間に限られたものであったが、その間舞踊というジャンルは認知度を得、同時期に開設された各種公共スペースに創作活動の場所を得るようになった。この変化を地域的な要因に帰するとすれば、一つには、当時の関西文化圏全体に共通して舞踊関係者の間に高まった創作舞踊環境の(国際的かつ東京に対する)「遅れ」の認識に求められる。しかしより能動的な活動につながる契機として強調したいのは、当時京都における若い芸術家や学生を基盤とした社会文化的な活動と、コンタクト・インプロヴィゼーションの受容者層が気脈を通じていたことである。コンタクト・インプロヴィゼーションのワークショップ等の製作は、定期的に開催されていたダンス関係者の集まりから生まれてきたものだが、その参加者は同時期の京都で行われた文化カフェのそれと重なり合うものであった。ここに、コンタクト・インプロヴィゼーションと、京都の社会文化的な要求との合致を認めることができるのではと筆者は考えている。

以上のことをまとめるべく初めの問いに戻ると、京都におけるコンタクト・インプロヴィゼーションのはたらきは、自ら創造する舞踊家を養成したこと、それまでの舞踊創作を取り巻く状況を芸術的にかつ制度面において相対化したこと、そして、舞踊創作に関わる人々の交流を開放的なものとしたことの中に認められるだろう。